特集

凧

お正月の風物詩、凧揚げ。それは日本特有の風習ではない。世界を見渡せば、凧の形状や素材、模様はもちろん、役割においても日本とは異なるさまざまな習わしがある。人びとは凧に何を思い、空高く揚げるのか――。今回は、そんな凧にまつわる各地の文化を紹介したい。

世界の凧、アジアの凧

塚田誠之　民博 名誉教授

凧揚げは、日本では一般に正月の風物詩になっている。最近は、都市での広場の減少や少子化、遊びの多様化などで子どもが凧揚げをする光景を見る機会は減少している。しかし、冬休みには凧作り教室が開催され、正月の装飾にも用いられる。正月に限らず、日本各地で自治体などが主催するさまざまな規模の凧揚げ大会がおこなわれているのをメディアで見かける機会も少なくない。

凧揚げの起源

凧揚げの歴史について、特に中国が起源地のひとつと考えられている。日本へは八世紀に遣唐使がもち帰ったのが最初であるらしい。朝鮮半島の凧も中国伝来である。東南アジアやオセアニア、欧米にいたるまで世界中で広くおこなわれていることからすれば、それぞれの地域で独自に発明された可能性があるが、中国で早くに考案され、長く伝承されてきたことは間違いないようだ。

中国では凧を「風箏」といい、「風の琴」を意味する。一〇世紀に宮廷で笛をつけた凧を揚げて、その音色を鑑賞したことにちなむ（なお、「凧」は日本で作られた漢字である）。また、形が鳶に似ていたので紙鳶ともよばれた。その起源は軍事用であったといわれる。紀元前三〇〇年ごろに墨子やその弟子公輸盤（魯班）が木製の鳥の形の凧を揚げて、敵の城の防御状況を偵察しようとしたという。また、漢の劉邦が垓下の戦いで、楚の項羽を包囲した際に、大きな凧を作り、その下部に吊り籠をつけて笛を吹く者を乗せて楚軍の頭上において故郷の曲を吹かせ、楚軍の兵士の士気を萎えさせたという。このように軍事目的で始められた凧揚げが、娯楽として庶民に広まるのは、紙が普及した一一世紀、北宋時代以降のことで、清代になると正月に欠かせないものになった。

100畳敷東近江大凧（2012年）［提供：世界凧博物館東近江大凧会館］

凧揚げの起源

凧揚げの歴史について、特に中国が起源地のひ

各地に根付く風習

中国では、凧揚げは子どもだけでなく大人の手軽な娯楽として発展してきた。大人でないと揚げることができないような長く大きな連凧や技術の必要な複雑な作り物もある。マレーシアでは四〇〇メートルを超えるほど高く揚げ、高度な操作技術を要する糸切り合戦がおこなわれるので大人も多く加わる。なお、けんか凧は日本、朝鮮半島などでも見られる。

中国では正月（旧正月）から清明節（墓参りの日、四月五日前後）のころまでが凧揚げの季節だ。北京では秋から清明節にかけて農閑期で、空気が乾燥して凧揚げに適した風が吹くことが多い。日本では正月のほか、子どもの誕生の祝いや成長祈願を目的として端午の節句や、それぞれの地方でよい風の吹く時期や祝祭に合わせておこなわれることもある。マレーシアでは稲の収穫が済んだ四月から六月にかけて揚げられ、インドでは地域によって異なるが、一月一四日ごろや八月一五日ごろに揚げられたところもあるようだ。凧揚げの時期はところによってずいぶんちがう。なお、娯楽以外にも実用的な目的でおこなわれるものもある。ソロモン諸島などでは、かつて凧を揚げて水面近くを泳ぐダツを釣る「凧揚げ漁」がおこなわれていたという。また、マレーシアなどでは今は娯楽というよりも政府主導で独立記念日などに大会がおこなわれるという。

清末のころの北京の凧揚げ。中国文学研究の泰斗、青木正兒（まさる）博士が編集した清末・民国初期の北京の風俗を伝えた史料である　［出典：『北京風俗図譜』七・遊楽「童子嬉戯（どうじきぎ）――其一」（東北大学附属図書館所蔵）］

マレーシアの凧「ワウ・プラン」（月凧）。尾部は三日月をかたどったもので、マレーシア航空のシンボルマークにも図案化されるほどポピュラーである。他にも種類が多いが、いずれも他国にはない独特の形をしている（H0172999）

見て楽しい凧の形

凧の形は各国で異なる。日本では角形のものが多いが、菱形、円形、細工凧、やっこ凧などさまざまなものがある。マレーシアでは飛行機のような独特の形をしている。中国の場合、鳥なら鳥、魚なら魚そのものの形をしているのが特徴で、その種類も多く六〇～七〇種あるとされる。鳥（タカ、ツバメ、ツル、フクロウなど）、昆虫（トンボ、セミ、蝶、テントウムシなど）、水のなかの生き物（魚、カエル、カニなど）、パンダ、果物や野菜（モモ、ハクサイなど）、想像上の動物である龍・鳳凰、人物（孫悟空、魔除けの神とされる鍾馗、ダルマなど）など。語呂合わせや吉祥の絵柄も好まれる。

このように凧の形や時期、意味合いなどは異なるが、凧揚げを楽しむ行為はおおむね世界共通であろう。人びとの暮らしが変わっても、凧揚げは世界各地でおこなわれ続けている。なお、アジアの凧について、さらに詳しく知りたい方は『みんぱく発見4　アジアの凧』（塚田誠之編、千里文化財団発行、二〇〇〇年）をご覧下さい。

龍頭ムカデ凧と筆者（北京、2003年9月）

インド・パキスタンのけんか凧

小西正捷　立教大学名誉教授

年の節目に揚がる凧

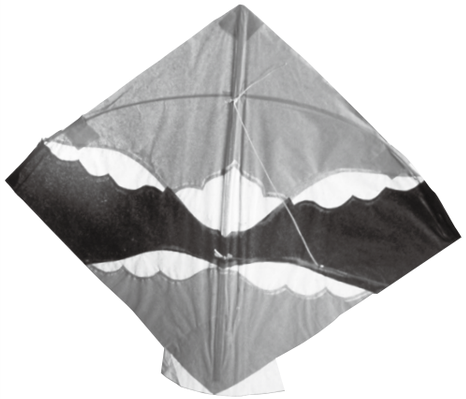
西インドのアフマダーバード市中では、昨日までの小間物屋・靴屋・用品屋が、一夜のうちに一斉に凧屋に変わった。破れやすく、糸が切れて行方知らずとなることも多いし、一枚数円ほどの値段なので、数百枚という単位で凧を抱えて帰っていく客もいる。これは北インドの他の都市でも同様の風景である。

今日はヒンドゥーにとってのマカラ・サンクラーンティという祭日。凧揚げがこの日だけに限られているわけではなく、北行してきた太陽のめぐりがこの日以降南行するため、冬が終わり春が始まるという年の節目が意識されている。凧揚げといえば我々には正月行事というイメージが強いが、インド・パキスタンでは「正月」は各地各様であって、一概にそれがいつとは限定できない。南インドのポンガル祭や、東インドの春の大祭ヴァサンタ、あるいは年によって日どりは大きく動くがムスリムにとっての大祭イードなどが、一年の大事な節目となる。

人びとを熱狂させる勝負

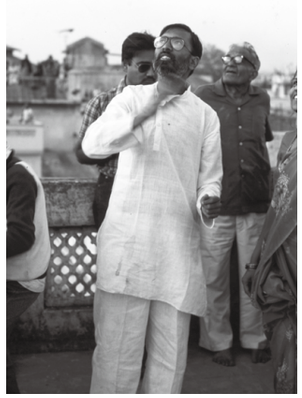
一方、商人たちやその社会にとってはむしろ、帳簿をすべてあらたにする秋のさなかのディワーリー祭が最大の節目である。グレゴリオ暦の正月や、まってクリスマスには町は何事もなくひっそりとしているが、文具屋や本屋にはディワーリーになるとクリスマスカードならぬディワーリーカードが並んで、「年末」の気分を盛り上げている。ただし凧は、どの季節に揚がっていてもおかしくはないので、季節のいかんにかかわらず、大都会ならいつでもどこかで似たような凧が揚がっているのが見られるだろう。宗教や地域には必ずしもこだわらない鷹揚さと、単純な幾何学文もあいまって、そっくりな凧が国や地域を越えてインドやパキスタンのどこでも見られるのだ。

それだけでなく、その一見単純な操り方や遊び方が人びとを熱狂させることも大きな特徴である。すなわち、そのデザインからして扁平で、菱形ながら尾すらないので揚がりにくいが、揚がっても上下左右に激しく旋回して他の凧や凧糸に絡んで糸を切るため、いくつの凧を撃沈したかが強い凧の証となる。このけんか凧には強い糸が必須で、そのため凧糸には念入りにガラス粉が練り込まれていて、凧を操る人には革の手袋が欠かせない。高みからの勝負とばかり屋上から空を見上げたままでの凧揚げは危険だし、糸の切れた凧を追って道を走り回る子どもたちの交通事故も毎年報じられるが、それでもけんか凧の熱は簡単に収まりそうにはない。



典型的なインド・パキスタンの凧。三色の薄葉紙（うすようし）を貼り合わせている。パキスタン・ラーホール市で入手（1982年）

上：凧を作るムスリムの子どもたち
下：凧より重要かもしれない凧糸。練った米粉に少年がガラス粉をまぜて凧糸を用意している
（ともに西インド・アフマダーバード市、1985年）



敵の凧の糸目を狙って、屋上から熱心に凧を操るアフマダーバード市民（1985年）

オセアニアの漁撈用の凧

林勲男　民博 学術資源研究開発センター

凧を用いる漁法は、東南アジアからミクロネシアやメラネシアにかけての島嶼部で広くおこなわれていた。ソロモン諸島では、凧から吊り下げられた釣り糸の先端に付けるのは、クモの糸であった。クモの糸を集めて擬餌とし、釣り針は付けない。狙うのは、体が細長くて両顎が前方に尖ってノコギリ状に鋭い歯が並んだダツである。ダツが餌だと思って噛みつくと、その歯や顎にクモの糸が絡まって身動きができなくなってしまう。それを船にいる漁師が手繰り寄せるわけである。

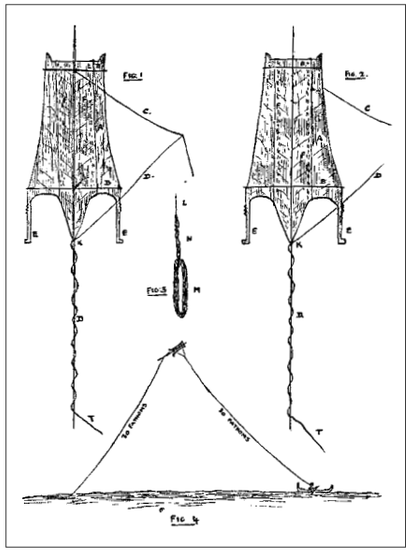
凧と擬餌

凧はサゴヤシかゾウゲヤシの葉を用いて作ったものが多い。葉と葉を接合したり強度を増したりするために葉柄（葉を支える柄の部分）や細い棒を使うものもあった。凧の上部で棒を横に渡し、その中間点から伸ばした紐と釣り糸を結び付ける。釣り糸は凧の中央を縦断する棒の下部に何度か巻き付けたのち海面まで伸ばし、先端に擬餌を付ける。

擬餌を作るには、五〇～六〇センチメートルの細長くて硬い葉をクモの巣の真んなかに差し込み、葉を回すことで糸を絡めとっていく。いくつかのクモの巣でそれを繰り返す。葉の全体がクモの糸で覆われると、手元から先端に向けて糸を一気に押し上げてとり外す。その輪の長径を五～六センチメートル程度にして釣り糸の先端にとり付ける。当然のことながら、この擬餌に掛かった魚を外すのは一苦労である。

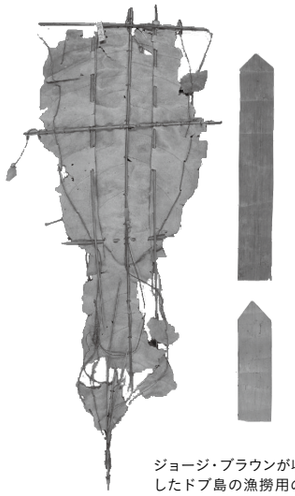
民博の収蔵品から見る凧

民博には、ソロモン諸島以外にもドブ島（現パプアニューギニアの一部）とミクロネシアのギルバート諸島の釣り用凧も収蔵されている。前者は英国人宣教師ジョージ・ブラウンの収集によるもので、約三〇〇〇点ある彼のコレクションのうちの二点がそれである。後者を収集したのは日本人画家の染木煦であった。彼は、昭和九（一九三四）年に当時日本の統治下にあった南洋群島のほぼ全域を巡遊し、現地では民族誌学者のように、風俗や自然を油彩画やスケッチに記録しながら五〇〇点以上の生活品も収集した。そのほとんどが旧文部省史料館を経由して民博の収蔵となっており、そのなかに漁撈用の凧も含まれている。



エッジ-パーティントンが描いた
ソロモン諸島のマライタ島の漁撈用凧
［出典：T.W. Edge-Partington（1912）Kite Fishing by the Salt-water Natives of Mala or Malaita Island, British Solomon Islands *Man* vol.12］

マライタ島西岸中央部に住むランガランガの人びとの漁撈用凧（H0098894）



ジョージ・ブラウンが収集したドブ島の漁撈用の凧（H0137512）

タイの凧揚げ今むかし

岡部真由美（おかべ まゆみ）　中京大学准教授

人びとを魅了してきた凧

日本では、凧揚げは正月の風物詩だといわれるが、タイでは、正月の風物詩といえば「水掛け」である。一年間でもっとも気温が高い四月半ばに、人びとは水を掛け合って盛大に正月を祝う。一方、凧揚げがおこなわれるのは、伝統的に、稲刈りを終えてから正月を迎えるまでの農閑期である。広い田んぼのなかで、暖かい風にあおられた凧が空をゆらめくさまは、何とものどかで風情がある。

タイを代表する凧に、星形の凧ワーオ・ヂュラーと、ダイヤ形の凧ワーオ・パックパオの二つがある。アユタヤー時代から受け継がれるこれらの凧は、薄い紙と竹で作られ、色も模様もほとんどない。見た目はいたって地味な凧だが、その独特の形状と空中での動き方を生み出すには、熟練した職人の技が必要とされる。また、身近な動物である鳥、蛇、魚などを象（かたど）った凧が各地で作られてきた。今日では、ビニール製のカラフルなキャラクターものやメッセージ性の高いものが多く、凧の種類はじつに多様化している。

歴史的にみて、タイでは、凧揚げは民衆の娯楽にとどまるものではなかった。タイ各地の古い寺院の壁画には、王室の儀礼で凧を揚げる様子が克明に描かれ、また凧は厄除けの道具や武器として用いられることもあったようである。一七世紀後半、アユタヤー時代にタイを訪れた外国人高官や宣教師らは、国王が冬の二カ月間、毎晩、凧揚げに興じていたと記録している。ラッタナコーシン時代に入ると、凧揚げの人気はますます過熱し、国王ラーマ五世が主導して王宮前広場で「凧揚げコンテスト」を開催するようになったほどである。

上：ワーオ・ヂュラーとよばれる星形の凧
［提供：世界凧博物館東近江大凧会館］
下：ふくろうを象ったカラフルな凧（H0005844）

凧揚げのあらたな価値

タイ社会の近代化の過程で、凧揚げは、セパタクローなどの遊戯と同様に、競技としての色合いを強めていく。競技とは、たとえば、ワーオ・ヂュラーを揚げるグループとワーオ・パックパオを揚げるグループが対抗して複数の凧を揚げてぶつけ合い、地面に落ちた凧の数の多寡を競う、というものである。一九二七年の「シャム・スポーツ協会」設立は、凧揚げに、タイの「伝統スポーツ」というあらたな価値を与える契機となった。この協会を設立したプラヤー・ピロムパックディー氏は、凧揚げ競技の達人であったといわれる。凧に造詣が深く、「凧の先生」として広く知られる彼は、凧に関するあらゆる知識をまとめた本も出版している。じつは、この人物こそが、いまや世界中で愛飲されている「シンハ・ビール」で有名なブンロート飲料の創立者でもある。

高層ビルやマンションが林立し、幾重にも電線が張り巡らされた都市部では、今日、凧を揚げる場所を見つけることさえ容易ではない。ましてや、子どもたちを刺激する娯楽は他にもたくさんある。観光化されたイベントのほかに、凧揚げを楽しむ機会は失われつつあるのが現状である。それでもせめて、「シンハ・ビール」を飲むときには、かつてタイの人びとが打ち興じた凧揚げの風景に思いを馳せたいものである。

インドネシア、中部ジャワの凧事情

今村宏之（いまむら ひろゆき）　総合研究大学院大学博士課程

祭りとけんか

インドネシア語で凧（ラヤン・ラヤン）とインターネット検索すると、インドネシア各地で、凧揚げ祭が開催されていることがわかる。ジャワ島中部の古都ジョグジャカルタの南にあるパラン・クスモ海岸では、二〇一三年から毎年一回、州観光局の協賛で国際凧揚げ祭が開催されている。この海岸はインド洋に面し、強烈な潮風が吹き荒れるため、技術がなければ凧揚げが難しいという。龍舞の龍のような頭に一〇〇個ほどの円形の凧を並べて胴体に見立てた、長さ一〇〇メートルもあるナガ（龍）という凧が注目を浴びていた。一枚の生地で作られる凧と異なり、立体感もある。一〇〇個の凧が連なって飛ぶ姿は、日本人のわたしからしてもスペクタクルなものに見えた。

また、いわゆるけんか凧（ラヤン・ラヤン・アドゥアン）もあるようで、大きな凧が悠々と舞う凧揚げ祭とは趣が異なる。川岸や街中の広場で、大人も子どもも小さな凧を揚げて走り回っている風景を記録した動画が、動画投稿サイトYouTubeに大量にアップロードされている。凧のインターネット通販も盛んらしい。

インドネシア・バリ島でおこなわれた凧揚げ大会（1994年）
［提供：世界凧博物館東近江大凧会館］

凧揚げの思い出

中部ジャワの農村で幼少期を過ごしたジャワ人の友人に聞いたところ、凧揚げはよくする遊びのひとつだったという。彼の当時の小遣いは一日五〇ルピアで、道端で売られているテンペ（大豆の発酵食品）の揚げ物をふたつ買うのが精いっぱいであった。プラスチック製の凧は安いもので二〇〇ルピア、高いものだと一〇〇〇ルピアほどで売られていたそうで、少なくとも四日は無駄遣いを我慢しないと買えないおもちゃである。田んぼや屋根の上で凧を飛ばし、木に引っかかろうものなら意地でも取ろうとしたし、木に引っかかったまま放置されている凧を見つけたら儲（もう）けものだ、と友人は語ってくれた。二〇〇〇年以降、彼の住む地域で凧揚げ遊びを見かけなくなったそうである。

都市集落の子どもたちの遊び

筆者は、ジョグジャカルタの都市集落を中心にフィールドワークをしているのだが、街中で凧を見かけた覚えがない。都市集落の空には電線が張り巡らされていたし、幼稚園児や小学生くらいの年齢の子どもたちは、普段は狭い路地を走り回り、自転車遊びやボール遊び、土いじりに興じていた。家のなかではスマートフォンとテレビに夢中であった。どうやら、七～八月が凧揚げのシーズンで、八月一七日のインドネシア独立記念日に合わせて凧揚げをすることもあるという。都市集落の子どもたちも、祝日には遠出して凧揚げをしていたのかもしれない。

インドネシアの紙凧。全長は90センチメートル（H0005913）

パレスチナの凧揚げ、夢と現実

菅瀬晶子　民博 超域フィールド科学研究部

子どもの夢を乗せて

多くの日本人にとって、外国の凧揚げを見る機会はあまりないかもしれない。しかし海外に出るようになってまだ間もない二十代前半のころ、わたしはエルサレム旧市街の城壁の上で、凧を見た。真夏の七月下旬のことだ。凧揚げをしていたのは、地元のパレスチナ人の少年たちである。凧はもちろん自作したもので、細い木材を三本、真ん中を糸で縛って星形に整え、そこに六角形の紙やビニールを貼った、簡素な作りをしていた。これに赤と緑と黒と白、つまりパレスチナの国旗の色を塗って、夕空高く舞い上がらせるのである。

ガザ地区の子どもたちによる凧揚げ（2008年撮影）［写真：Newscom/アフロ］

イスラエルの占領政策により、ヨルダン川西岸地区やガザ地区から出ることはもとより、地域内の移動すらままならないパレスチナ人は、空を飛ぶものに強いあこがれを抱く。パレスチナ人映画監督の草分けであるミシェル・クレイフィ監督の作品「三つの宝石の物語」では、ガザ地区に住む主人公の少年が飼う小鳥が、自由への希求を象徴していた。凧揚げ遊びもまた同様で、境界を飛び越えて、世界中を旅したいという子どもたちの夢が託されてきた。

時代を映す凧

じつはパレスチナの凧は、日本と多少、かかわりがある。東日本大震災の翌年から、ガザ地区では国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）が主催する、被災地との連帯を示し、復興を祈るための凧揚げ大会がおこなわれている。この凧揚げ大会が契機となり、岩手県釜石市とガザのあいだでは交流が生まれ、ガザの子どもたちが被災地に招かれたこともあるという。

もっとも、凧というものは元来、敵情視察や攻撃など、軍事目的で開発されたといった説もあるという。ガザ地区の凧も、最近は夢よりも憎しみを託すものになっているようだ。昨年も毎年恒例の被災地復興を祈る凧揚げ大会が開催されたが、その翌月、火をつけた凧が攻撃目的でガザ地区からイスラエル側に飛ばされたと、各種メディアが報じた。長きに渡って封鎖され、イスラエルから断続的な空爆を受けているガザでは、イスラエルはもとより、パレスチナの現状を一顧だにしない世界に対して、諦念と憎しみが募っている。エルサレムの空に舞い上がる凧を見上げたときから、もう二五年の歳月が流れたが、いっこうに好転しないパレスチナの状況に、わたしも希望を見出せずにいる。

グアテマラの大凧

八杉佳穂　民博 名誉教授

死者に捧ぐ大凧

グアテマラ市から西に車で一時間あまりのところにあるサンティアゴ・サカテペケスでは、一一月一日と二日の万聖節（諸聖人の日）と万霊節（死者の日）に、墓地で彩り豊かな大凧を揚げる。墓の色を塗り替え、花でいっぱいにして、ごちそうを用意して、亡き人の魂を迎えるが、大凧を見に大勢の人が来るため、屋台がたくさんでて、町の人たちのもっとも楽しみな祭日ともなっている。

凧を揚げるのは、死者を敬い、死者と交流するためというが、先祖の霊の来訪を邪魔する悪霊を凧の紙に当たる風の音がはらうからともいう。現在は、いかに美しいか、いかに長いあいだ飛ばすことができるか、を競う場ともなっている。凧は凧揚げが終わると、燃やされ、灰は墓地に埋められる。

大凧とサンティアゴ特有の幾何文様の上衣をつけた女性たち（撮影：羽幹昌弘）

情熱と豊かな経済力

大空に揚げる凧は、直径が二メートルから五、六メートルの円形である。それ以上の一五メートルから二〇メートルに達する大凧も作るが、それらは、立てかけて見せるためのものである。

大凧の骨となる竹は、低地までおりて調達する。長い竹を、凧の大きさによって異なるが、三本から六本ほど放射状に並べ、中心部をリュウゼツランの繊維でこしらえた縄でくくる。大きいものになるとその中間にも補助棒を渡す。竹の枠に色とりどりの紙を貼るが、紙はユカ芋の粉とレモンの皮と水で作ったのりで貼りつける。

描かれる模様は、宗教的なテーマや人権問題などをとり扱っているものもあるが、幾何的なものが多い。幾何文様が好まれるのは、女性たちが着ている上衣の幾何文様と関係ありそうだ。

凧揚げの風習は二〇世紀の初めに始まったという。大凧の制作には、数カ月の日数と数十万円の費用が必要であるが、凧揚げが年々派手になりながら続いているのは、町の人たちの情熱に加え、それを支える経済力がしっかりしているからであろう。というのもサンティアゴ・サカテペケスは、首都のグアテマラ市に働きに行く人が多く、また首都の需要に応えるべく野菜や花などを生産しており、経済的にわりと豊かだからである。

大凧は使用後に燃やされるので手に入れることはむずかしい。
民博の資料とするためにもらった大凧の見本（H0200526）